



シエラレオネの真実 ——父の物語、私の物語——

アミナッタ・フォルナ 著

澤良世訳 東京 亜紀書房 2018年 465 p.

それほど読みやすい本ではない。覚えにくい様々な人名が現れ、えっとこの人は誰だったっけ、と前のページを繰ることになる。それでも、長く、こみ入った本書を読み終えたとき、これは書かれなければならなかった物語だと深く納得する。本書がすらすらと頭に入ってこないとすれば、それは筆者のとてつもなく複雑な経験を読者が追体験しているからだ。十歳の時に不条理な形で父親を奪われた娘が、自らの記憶と様々なインタビューや文書記録を重ね合わせて、事件の真実を少しずつ理解していく。本書に描かれているのは、まさにそのプロセスである。

筆者の父親モハメド・フォルナはシエラレオネ北部の農村で生まれるが、スコットランドで医学を修め、留学中に英国人女性と結婚する。医師として帰国し、東部のコイドゥで開業するが、政界に転じ、1967年の選挙で国会議員となった。翌年にはスティーブンス首相の下で財務大臣に任命され、民衆からの信望も厚かったが、その後首相との間に溝が深まり、70年に辞職した。スティーブンスから危険人物と見なされて逮捕され、いったん釈放されるものの、74年にはでっち上げの「政権転覆未遂」容疑で再度拘束され、翌年処刑された。

筆者は1964年生まれ。フォルナがスティーブンスと袂を分かち、危険に晒された家族が出国したのは小学校に上がるころだった。筆者にとってフォルナは政治家である以前に父親だ。本書では、シエラレオネ政治の流れを包み込むように、筆者を取り巻く家族の物語が展開する。両親の結婚生活とその破綻、義母との折り合い、父親の新たな愛人…。こうしたトピックとともに筆者と家族の暮らしが詳細に語られる。

本書は直接的な政治分析ではない。しかし、シエラレオネはもとより、アフリカ政治を学ぼうと非常に有益だ。独裁者に謀殺された政治家を娘と家族の視点から描き出すことで、シエラレオネ社会やそこに生きる人々の暮らしについて、また人々がどのような感情を抱いて祖国の政治を眺め、そこに関与したのかについて、本書は雄弁に語っている。シエラレオネ政治のいわば基層を扱った本書は、私たちにはわかりにくい社会のニュアンスを伝えてくれる。貴重な翻訳に感謝したい。

武内 進一（たけうち・しんいち／アジア経済研究所・東京外国語大学）

